二松學舍松苓會報

昭和62年12月1日創刊
平成21年3月20日発行
二松學舍松苓会
〒102－8336 東京都千代田区三番町6-16　☎03(3261)7408
振替口座 00180-5-160343
印刷　㈱サンセイ
〒103-0023 東京都中央区日本橋本町4-11-10 ☎03(5614)2515

祝・ご卒業

松苓会会長　神津　賢一郎

本年二松學舍大学を卒業の皆さん、四年間の学業を終え、晴れて学士の学位を授与されました。心よりお慶び申しあげます。また、皆さんの卒業を心待ちにしておられたご父母の皆様におかれましては、この経済的不況の中で、卒業を迎えたということは感慨無量な喜びであったと思います。衷心よりお祝い申しあげます。

卒業生の皆さんにとって、自分の人生設計に大切な進路を決める時に、この世界的な不況に遭遇し、さぞ大変な思いをされたのではと思います。不安な気持ちもあろうかと思いますが、このような時こそじっくりと腰を落ち着けて、真面目に粘り強く立ち向かってください。

創立者、三島中洲師は明治の浮薄な欧風化を嘆いて漢学塾を設立したが、今も正に浮薄なカタカナ文化が横行している。そして、これが人間のすることかと思うような事件が多発している。皆さんは、この世を正す気概を持って、二松學舍大学で培った、人間陶冶の建学の精神を生かして欲しいと思います。

さて、二松學舍大学を卒業される皆さんは、自動的に二松學舍大学の同窓会、つまり二松學舍松苓会の一員になります。本学を卒業した二万有余の先輩諸氏が皆さんと、熱い握手を交わす慶びで、お迎えいたします。卒業生同士は同じ建学の精神のもとに、勉学に勤しんだ仲間です。その絆を大切にしたいと思います。

ところで、松苓会は北は北海道から南は沖縄に至るまで、全国都道府県に支部があり、皆さんの先輩が活躍しております。自分の出身県でなく他県に赴任されてもその県の支部に是非顔を見せてください。喜んで歓迎する筈です。支部総会の案内などありましたら、出席して友好を深めていただければ幸いに思います。

平成21年度ホームカミングデー開催予告

—卒業生〈松苓会員〉懇親会—

主　　催　二松學舍松苓会・二松學舍大学
日　　時　平成21年8月2日（日）10：30～15：30
会　　場　大学九段校舎
会　　費　無料
イベント　卒業生・在学生・教職員合同作品展示会
　期間　平成21年7月27日(月)～8月2日(日)まで(予定)
　会場　九段校舎地下1・2階　展示ホール

松苓会・大学では、第5回ホームカミングデーを九段校舎で開催いたします。併せて合同の作品展も昨年同様に開催します。書・絵画・彫刻・工芸・写真・著書等を展示いたします。

ホームカミングデーには卒業生はどなたでも参加できますが、特に下記の卒業期(卒業後50年、45年、40年、35年、30年、25年、20年、15年、10年、5年を迎える卒業生)の皆様には改めて個別案内いたします。同期生お誘いあわせの上ご参加くださるようご案内いたします。

作品展も5回目を迎えます。卒業生はどなたでも出品できますので日ごろの成果をお寄せください。

文学部
第28回(昭和35年3月)卒業　第33回(昭和40年3月)卒業
第38回(昭和45年3月)卒業　第43回(昭和50年3月)卒業
第48回(昭和55年3月)卒業　第53回(昭和60年3月)卒業
第58回(平成2年3月)卒業　第63回(平成7年3月)卒業
第68回(平成12年3月)卒業　第73回(平成17年3月)卒業
国際政治経済学部
第1回(平成7年3月)卒業　第6回(平成12年3月)卒業
第11回(平成17年3月)卒業

ホームカミングデーの参加、作品展出品の希望者は、松苓会事務局までお問い合わせください。折り返し、出品要領等をお送りいたします。

事務局　東京都千代田区三番町6－16　二松學舍松苓会
電　話　03－3261－7408　　FAX　03－3261－8914
ホームカミングデー実行委員会

鼻(はなむけ)とお別れと

学長　今西　幹一

新卒・新入会員諸君に　平成二〇年度の卒業生の皆さま、卒業おめでとう。今回は卒業生全員が昭和世代で占められる最後の学位授与式になります。現在の三年生は、平成改元後の早生まれの学生が混じっています。だんだん「昭和」は遠くなって行くのだろうと思います。

諸君は未曾有の経済不況の中に巣立って行きます。企業倒産、生産規模の縮小、リストラ等々、さまざまな形で厳しい試練が襲って来る可能性が大である。むしろ必至な状況にあります。苦難の時代ですが、逆手にとって言えば、本当に力のある、苦境を打開できる有能な人材が求められるということです。すでに多くの企業においても、東大ほかの一部の「一流大学」出身者が幹部を占め、他の大学の出身者が下方に立つという時代ではなくなっています。またそういう企業は、脆弱になり、時代にそぐわなくなっています。個性のある、自立性のある、統率力のある人材、総合的なマネージメントが出来る、特定の分野のエキスパートたり得る人物が求められます。そうした要求に応ええるように、大学時代に勉学を基盤として、現場で多くのことを身に付け頑張っていただきたい。

諸君は、卒業と同時に二松學舍の同窓となり、同窓生の組織体である松苓会の一員になります。松苓会は、本部のほか殆どの府県、ブロック単位に支部があり、親睦と互助の活動を続けています。全体として同窓としての連体意識から結束も固く、地域差はあるものの総じて活動も活発です。殊に旧専門学校時代、大学初期の卒業生は、ことのほか帰属意識も強く活動の中心になっていてくれていますが、どうも若い人の参加が薄いようです。若手が不在なのかと思い調べてみますと、Uターン、Iターン、Jターンでけっこう卒業生がいます。まして首都圏は非帰郷組も含めて多数の卒業生が存在するのです。どうか奮って会合に参加され、会の活性化、若返り、二松の気風の伝承を計って欲しいと願っています。

松苓会員の各位へ　かくいう私は、二松學舍の卒業生ではありません。それもあって松苓会とは、着任後長く直接的には関わりは薄いものでした。副学長就任後、川久保学務局長（同時に松苓会の幹事）と、同窓会費の事前徴収に取り組みました。自主納入の関係上の財政的窮迫状態を打開しようというのにあった。幸い理事会、大学当局の理解を得、実現を見ました。その時の交換条件的な約束の困窮学生対象の奨学金の給付も実現を見ました。副学長・学長の任期中、松苓会との交流も繁くなり、総会を初め、各地の支部会へも参加する機会が増えました。いつも、どこでも、本学出身者の母校への篤い思いと友誼の厚さに心打たれて参りました。

その私も、いよいよこの三月末をもって学長の任期を終え、二十一年間の二松學舍での生活を終えることになりました。思いがけぬ役職につき、それがゆえに在職期間も延びましたが、母校ではありませんが籍を置く大学をよくしようと、微力は傾けて参りました。どこまで二松學舍の発展と基盤強化に寄与できたかはわかりませんが、多くの方々からご厚情を賜ったことは事実です。感謝しつつ、気持ちよく二松を去りたいと思います。

年に一度は母校へ戻ろう　副学長時代、同窓会役員との協議のなかで私の方で提唱したものに、ホームカミングデイの実施があります。年に一度特定の日に母校へ帰り、同窓同士世代を超えて交歓をしようというものであります。九段の現キャンパスの新築の前に、旧校舎を懐かしむ会を催されたのを契機に動きが生じ、小生が学長に就いた年にその第一回が開かれました。提案時の松苓会役員のY氏が、そのときどちらかと言えばコワモテのYさん（失礼）が相好を崩して、先生に言われたホームカミングデイがやっと実現しましたよと喜んでくれたことを憶えています。

そのホームカミングデイは毎年八月の第一日曜に開かれています。卒業生の皆さんもぜひこの日に合わせて年に一度は母校へ帰ってください。そしてかつての学友と久闊を叙し、また先輩と、将来は増えて来る後輩と交歓を図ってください。これまでは「お帰りなさい」と迎えていた私も、旧職員の一人として母校に近い親愛の情のある二松學舍にその日は帰りたいと思います。

最後に二松學舍の弥栄と同窓各位のいっそうのご多幸をお祈りいたします。新卒会員の皆さん、社会人としての巣立ちおめでとう。松苓会の皆さん、おめでとう。

祝・新会員を迎えて

理事長　大山　德高

今年も松苓会に新会員を迎える季節になりました。組織は、年々歳々新陳代謝を繰り返し発展してまいります。新会員のみなさんは、同窓会の新陳代謝を促進させる役割を担っており、先輩たちは期待しています。すなわち、新しい時代には若いみなさんが中心となって、自分たちの同窓会を創っていかなければなりません。しかし、この種の会には若い人の参加が非常に少ない。以前からですが、最近、頓にその傾向を強くしている感があります。会の性格なのか、年齢による事情なのか、また、その両方によるものなのか。いずれにしましても、同窓会の発展のためには、こうした状況を乗り越えなければなりません。私も千葉県支部をお預かりし悩んでいます。他大学の状況をみますと、老齢の先輩たちが役員として君臨し近寄り難い会になっています。とても若い人たちの集まることのできる雰囲気ではありません。何のために、誰のために会があるのかも分からない、表面的に役員のための会になっていることが多いようです。

同窓会とは異なりますが、ふるさと会なども同様の傾向にあります。最近、出身地の「ふるさと会」が都内で開かれ出席しましたが、年配者の集いになっていました。70歳前後の人たちが大半の20名ほどの会でした。昔をしのぶ会というのでしょうか。顔見知りも若干いて、旧交を温める会としては、多少は意味があったかなと思いました。若い人はいませんでした。ふるさとから毎年多くの若者が東京都その近郊に移り住んでいるはずですが。案内をしているかどうかは聞いてませんが。私にマイクが回ってきましたので、会からふるさとへの恩返しとして、「ふるさと納税制度」による寄付の呼びかけをしてはどうかと提案しておきました。ご存知のとおり地方ほど過疎化が進み、自治体の財政の厳しさが増しております。そんな折でしたので出身者としてふるさとにできることは何かと考えてみました。

同窓会活動の一つに、母校支援ということがありますが、新会員のみなさんも、先輩のみなさんと力を合わせ母校支援にご協力いただきたいと願っております。母校にできることは何か。在学中の後輩にできることは何か。私は以前に、地方での父母会に出席した折、松苓会支部のみなさんにも会い、地方へ帰ってくる後輩の就職活動に力を貸してもらえないだろうか、とお願いしたことがありました。就職の厳しい時です。支部と本部とが協力して支援体制を組む等、やがて会員になる後輩の支援に取り組んでほしいと願っています。そういったことが母校の支援の一つになるのではないかと思います。

さて、新会員のみなさん、ご存知のとおり、世の中は世界的不況の最中にあります。生きるのに大変苦労する時代です。大きな志を抱いて社会へ勇躍しようというみなさんには過酷な現実が待ち構えています。厳しい現実との対峙によって、志を曲げざるを得ない場面に多々遭遇するだろうと予想されます。志を果たすことの難しい時代であり社会です。こういう社会ですから敢えて申し上げたいことは、青年の心に燃え上がった志を捨てないでいただきたいということです。迂回せざるを得ないことがあっても、今、抱いている志を忘れず、抱き続け実現する日を望みながら日々を過ごしていただきたいと願っております。そのことが、みなさんを一層成長させる力になると信じている者です。先輩もみなさんに負けないようにがんばっています。みなさんのご健康とご多幸をお祈りします。

平成20年度支部総会報告

◇北海道支部

支部長　奥村　悠二郎

今年の冬は気象変動の影響か、一月に札幌で雪でなく雨が降り、翌日には一面スケートリンク状態となりました。

転倒者が多発したせいか、終日、救急車のサイレンが鳴りやむことがありませんでした。異常気象は身体にも変調をきたすそうです。皆さんも気をつけてください。

前号では、支部総会と道南分会の案内をいたしましたので、今回は以降の報告と、前号で案内した総会および道南分会の開催日と参加者を列記いたします。

平成二十年度北海道支部総会・開催日＝平成二十年八月三十日（札幌市内）

参加者
緑川佑介（本部）
中　紀義（31期）
奥村悠二郎（36期）
山崎郁紀（36期）
川谷文雄（39期）
増井義昭（39期）
不動和則（39期）
岡野誠一郎（45期）
佐賀敦司（49期）
花木　弘（49期）
吉野泰正（55期）
加藤哲朗（55期）
若松顕仁（56期）
永田哲之（65期）

平成二十年度道南分会総会・開催日＝平成二十年十月十八日（函館市内）
参加者
南部知正（37期）
田島基義（38期）
開原正信（39期）
古賀俊治（40期）
吉川　肇（59期）
吉川真理絵（60期）
奥村悠二郎（36期）
山崎郁紀（36期）

平成二十年十二月六日、かねてより準備されてきた「胆振分会」がいよいよ発足しました。室蘭工高に勤務する永田氏の尽力により、室蘭市内「番屋」にて第一回の懇親会が開催されました。当日はあいにく吹雪模様の悪天候に見舞われて、少ない参加者でしたが滝川から吉野氏も応援に駆けつけ、発会に花を添えていただきました。

伊達市の田野氏も久々に元気な顔を見せ、胆振の昔話と豪華な海鮮料理に話が進み、その後は二次会に繰り出し、楽しい一夜を過ごしました。

今後は、積極的に地域の同窓生に参加を呼びかけ、参加者の増員を目指します。

（若松記）

参加者
田野公司（32期）
永田哲之（65期）
吉野泰正（55期）
奥村悠二郎（36期）
若松顕仁（56期）

平成二十一年一月十二日、毎年恒例の新年懇親会を札幌市内で開催しました。札幌市内および近郊の支部会員が集い、お互いの無事の確認と、参加者が入手した支部会員の現況情報が酒の肴となり、楽しい宴を過ごしました。久しぶりの松田氏より、大学を訪問した時の話題が提供され、参加者の共感と郷愁を呼び、なお一層の盛り上がりとなりました。

又、訪問時の大学職員の対応に大感激をした様子が伺われ、対応された職員の方に感謝いたします。有難うございました。今後ともよろしくお願いいたします。

参加者
松田敏明（34期）
奥村悠二郎（36期）
山崎郁紀（36期）
増井義昭（39期）
岡野誠一郎（45期）
花木　弘（49期）
吉野泰正（55期）
若松顕仁（56期）

以上が、支部活動の年間行事となっていますが、道東分会と道北分会が加わると、更に活発な支部活動を展開することとなります。

◇秋田県支部

支部長　三浦　基

秋田―ふるさとの文学

平成二十年十一月一日午後二時、あきた文学資料館を会場に、「秋田―ふるさとの文学」編集委員会が開催された。ようやくこの時を迎えることができた。今年度七月初め、第二庁舎での話し合いから四箇月でこの日を迎えた。佐々木久春先生を始めとする国語の諸先輩、根岸教育長、高校教育課指導主事、総合教育センター指導主事のご支援、今日という日のプロローグを組み立てていただいた編集委員の皆様に感謝したい。

高教研国語部会中央地区部会長一年、次年度、全県の部会長。その年が県立秋田北高校での東北大会。今年度で三年目になる。高文連演劇部会長は四年目。国語と演劇は東北大会の開催順が同じ年。国語も演劇も、常に改革、若手の育成。あの七月初めのあの日、私の背中を押してくれたのは、三年がかりでようやく勢いの出てきた研究部員の姿。国語部会を勢い付かせる絶妙のタイミングだという意識。

ふるさとの「こころ」・「文学」を高校生に伝える。私たち国語教師が、秋田の文学者・文学環境を理解する。学びの

場が出来つつある研究部の活動とすることで、国語部会の活性化を図る。さらには教材化し、授業実践を積み上げ各地区研究大会、東北大会で発表する。また、編集・執筆にかかわることで、国語教師自身の力量を高め、連帯のこころや共同の学びを生む。このままでは国語が危ない、若手の学びの場がないという危機意識であった。

県北、中央各地区研究大会で説明し、十月二十八日の全県研究大会（兼県南大会・角館高校）で国語部会臨時総会を開催、承認を得た。一箇月後、高校長協会例会で資料をもとに説明した。来年度全体編集委員会二回開催、新入学生用に副教材としての活用をお願いし、理解協力を得た。

人的ネットワークはベストに近いものがある。人生の妙を感じる。

その昔、研究部員として、また、何回目かの「秋田の文学」編集委員にと声をかけていただいた方々への、ほんの少しの恩返しになればと、そんな気持ちもある。平成二十一年度十二月の発行、次年度四月から副教材としての活用、授業実践、研究発表と続く。その頃には改訂版の話題が出てくる。本物の学びの場がつくられる。一人の国語教師として、秋田の高校生のために、ふるさと秋田のために、「秋田―ふるさとの文学」の行く手を見守りたい。

（秋田県高等学校教育研究会国語部会長・秋田市立御所野学院高校長）

◇岩手県支部

支部長　宮本　義孝

より良く生きるための工夫

〈新しく社会人となる皆さん〉

人となり此の世に生まれたからには、与えられた生命（いのち）を意味あるものにしたいとは、誰しも願うところです。が、それにもかかわらず、自分を生かしきれないまま、一生を終える人が結構いるものです。

では、どうすれば、人は生き生きとした生活を送ることができるようになるのか、ですが、これには多少工夫がいるようです。

と云って私自身、人に語れるようなものはないのですが、これまでの生活で心掛けて、これは良かったと思えるものを一つだけ紹介すると、それは、人生という時間を一つひとつ限って生きよ、ということです。

これまで私らは、小学校六年、中学・高校はそれぞれ三年、大学は四年と、歳月を限り、その中で到達すべき目標を設定し、実践し、評価するという具合に生活してきました。

ところが学業を終えて社会に出ると、多くの人は、時間に厳密さを欠き、曖昧に生きるようになります。四十年、五十年という歳月は長いけれど、過ぎてみれば、あっ、という間です。気がついたら、何となく生きていた、何もしていなかった、ということになりかねません。

曾つて、作家の畑山博と話をした時、彼は五年ごとに区切って生きている、といっていました。

作家として、書きたいテーマが生まれれば、資料を集め、資料を読み、イメージを膨らませてゆく。作品を実際に書き出すために、表に現れない時間が必要だからでしょう。が、普通の人なら五年はちょっと長い、三年ぐらいが良いように思います。そしてその中で目標を決めます。

目標は、やれそうで価値があると思うものなら、何でもいい。漱石全集をちゃんと読もう。フランス語会話ができるようにしたい。ギターを弾けるようにしよう。景色を絵に描けるようにしたい。そして、それができれば、今度は、奥の細道を旅して風景を絵に残したいとか、仲間内でコンサートを開こうとか、作曲をやってみようとか、フランスに行って美術館巡りをしたいとか、次は、ドストエフスキー全集に挑戦しようとか、計画は膨らんで、その後の三年へつながっていきます。

芸術とか学問とか、よほど専門的なものでない限り、我々の生活の糧となる仕事は、三年もあれば大抵身につきます。教職にいた私の経験からでも、一通りの授業や事務的な仕事は何となくできるようになります。けれど、生徒の人格と向きあう教師の力量とか、教師としての人間的魅力だとかは、生涯に渡って育てつづけなければいけません。つまり、時間を三年と限り、そこで意識的に育てたものを次の三年につなげていくという生き方です。

考え方の止揚とか感動とか、生きる本当の喜びだとかは、ただ、何となく、からでは決して生まれません。不断のこうした努力の中でしか、生まれてこないものです。

社会に踏み出たばかりの皆さん方は、生活の変化に馴れるだけで今は精いっぱいでしょうが、やがて落ちついて余裕が出てきたら、是非、時間を限って生きる生き方を、自分自身のより良い生活のためにも、考えてほしいと願うものです。

今朝の新聞（一月二十七日付）で萩谷朴先生の訃報を知りました。ご冥福をお祈り申し上げます。合掌。

◇宮城県支部

支部長　千葉　仁

地方史と漢文

1、国語教師五十年

三島中洲先生像を朝夕に拝みながら、十三階段を上下し、『養氣集』の「休道他郷多苦辛、同胞有友自相親、・・・」（桂林荘雑詠）の気分で、四年間の日々からもはや半世紀が過ぎましたが、つい最近のように思い出されます。三十八年間公立高校の教諭・教頭・校長を勤め終え、その傍ら東北大学教育学部の非常勤講師として国語教育論を講じ、以後は私立大学・専門学校で学生に国語を教育し、教歴五十年に達しました。

長年、いわゆる受験校で大学入試の学力養成の指導に当たりまして、現代文・古文・漢文・小論文指導を担当しました。若い教師仲間とも研鑽しながら、口頭・論文発表もしばしばしました。特にラッキーだった点が二つあります。一つは健康に恵まれたこと。これまで病気で欠勤することは稀でした。学童時代からの無欠席の延長で、ひそかな健康への用心の効果であります。二つには「漢文が読める」ことです。二十歳代に二つ目に赴任した高校で、進学校同士の「連合模擬試験」に試験問題を作成するよう命じられ、競って出題された中から四問題の厳選に漢文問題で当選しました。以後は校長をはじめ、未知の先達から熱い声をかけられるようになり、おかげで希望する学校に赴任することもできました。各種問題作成・問題解説・大学センター試験問題分析、受験雑誌の原稿等を依頼されました。その間、公私の多方面から碑文・掛け軸・宝物等の読解等を依頼され、取り組みました。

2、地方史資料が泣いている

宮城県立図書館・仙台市立図書館には、熱心な愛好者・研究者の要望に応える「地方史特別コーナー」が整備されています。明治以前の貴重な資料が勢揃いしています。私は先年、仲間から「地方史の漢文資料を読みたいが、読めないので手ほどきを願いたい」と懇望されて引き受けました。その基本資料として伊達藩の学者たちの労作が活字本の叢書として多数並べられていますが、詳しく読まれた形跡が無いことに驚愕しました。「仙台叢書」十三巻等に伊達藩の歴史の基本図書・資料が収まっているのに、あまり活用されず死蔵状態になっています。ぜひ読まなければならない基本資料なのに、漢文が読めないという悲哀なのです。戦前の地方史家・愛好家は読めたので生のままで資料として駆使しましたが、以後の資料には原文の引用等がなく、孫引き程度の活用で肝心なその叢書の元資料の活用が激減したようです。その資料・叢書を活用すればさまざまなテーマに挑戦できるのに、資料の駆使が不如意なために、側面的・傍系的なテーマに傾斜している観を禁じえません。図書館の係りに聞いても強ち臆測でもなさそうです。

3、今の二つの取り組み

わが家近くの古刹の歴史を調べ、伊達家ゆかりの瑞巌寺の中興第一世の雲居国師の開山・塔所であることは、かねて断片的に聞いていました。全体的な調査に着手し、瑞巌寺に赴いて関連資料を入手し、伝記の碑が関連箇所に三基もあり、撰文と撰者が異なり、読解されないままになっていました。それの解読から試み、図書館と寺からさらに資料を入手し、『雲居和尚紀年録』も合わせて読破できました。二年かかりました。伊達家の危機を救った大功労者で、没後七十五年後に国師の称号を下賜されました。（国師は全国で七十七人だけ、という名僧です）

伊達家の危機の実態に興味を持ち、その歴史を調べるために、伊達藩の儒者・佐久間義和（洞巌）著『伊達政宗卿年譜』が「仙台叢書」第一巻の冒頭に編まれており、それを読解することにしました。上下二編構成の格調高く最も権威ある伝記であります。小説や歴史書に出てくる政宗関係の伝記・史実が克明にしるされており、これをネタに各種の「政宗伝記」が書かれたことがよくわかりました。司馬遷の『史記』を読む心地がします。仲間にその話をしましたら、ぜひ読みたいので手ほどきを願いたいと懇望され、昨年五月から開始しました。地方史の愛好者が、こんな大事な基本資料を見逃していたと残念がり、みなでそれぞれの蘊蓄を傾けて嬉々として読解に挑戦しております。学生時代の講読の楽しみを取り戻したような気分でおります。もっと早く気づいて始めるべきだったと思っております。

4、各地方史の漢文資料を松苓会員の手で

伊達藩と同様に全国各地に地方史の漢文資料があり、各図書館には専門的に地方史特設コーナーが設けられているものと推察します。漢文資料がホコリを被っていないでしょうか。また、それらの第一級の基本資料を読みたがっている愛好家・地方史家がたくさんおられるのではないでしょうか。図書館の窓口に訪ね

ればすぐにわかります。

さて、松苓会の皆さん、あなたの出番です。必ずやたくさんの仲間が集まります。わが郷土の第一級の基本資料・史料・漢詩・碑文等を読解し、知友・後輩・学校・地域に正しく伝承できるではありませんか。学ぶ喜びが湧き出します。

いま、改めて漢文が読めることの貴重な存在を実感します。松苓会・母校のためにも、全国の松苓会の誇るべき試みとして盛り立ててはいかがでしょうか。他の団体のまねのできない文化・教育・生涯学習の運動だと思います。（平成二十一年二月八日）

◇栃木県支部

支部長　桜井　哲夫

栃木県支部長の桜井です。四十一期卒業です。私の勤めは栃木県立益子芳星高校。益子焼で知られる益子町に学校はあります。あとわずかとなった教員生活のしめくくりに、里山の眺めも美しいこの学校を選びました。冬の駐車場に着くと、エナガやシジュウカラの声が私を迎えます。まもなくウグイスの声も聞こえることでしょう。国語科の教員は五名、七十四期卒の苅部貴美さんがいます。一学年普通科四クラスの男女共学校。女子の人数が六割を占めます。

「先生、大好き。」女子の声に振り返ると、「私のおじいちゃんになって。」そう、確かに年寄りになりました。教員生活三十六年、早いものです。

私にはあるくせがあります。授業の始めに黒板を念入りにきれいにする。掃除の時間、指導もせずに黙々と自分がほうきを握ること。七校目の勤務校となっても、ついついやってしまいます。このくせの源は、二松學舎の四年間の生活にあるようです。私は一年生から四年生まで、大学のそうじのアルバイトをしていました。朝夕二時間ずつのそうじ。当時大学は五階建て。夕方は二時間では終わらない日も多くありました。夏休みには、「そうじ合宿」と称して屋上にテントを張り、大学中を徹底的に磨きました。楽しい思い出です。たいして勉強もしなかった私が、教員になり、なんとかがんばって来られたのも、このおかげかも知れません。私はどの勤務校でも胸を張って、母校二松學舎の話をします。誇れる母校であることをうれしく思います。

支部長という立場で、母校にできるかぎりの恩返しをして行きたいと思っています。

栃木県支部では、昨年六月十四日（土）に支部総会を開催しました。大学説明会に合わせての開催でした。開催には大学の入試課の先生方に大変お世話になりました。ありがとうございました。宇都宮ポートホテルでの支部総会、そして懇親会。支部からの出席者は八名、大学からは六名の参加でした。

渡辺和則副学長から大学の近況等、神河秀春就職部長からは、松苓会本部、東京支部の様子などもお話いただきました。次回はさらにたくさんの人に参加していただけるよう、がんばってまいります。よろしくお願いします。

◇千葉県支部

支部長　大山　徳高

千葉県支部では、支部報第十二号を平成二十年十二月一日付で発行した。部数一千部。内容は、

千葉県支部総会を終えて
　大山　徳高支部長
我が母校　二松學舎大学
　橋本　浩（政経5回）
大学を卒業して
　仲田　淳一（72回）
支部会員の近況
文芸欄
　秋のおもい
　　嵯峨　恵子（45回）

その他、支部総会報告、収支決算報告となっている。

尚、支部会員三千九百六十一名（平成二十年三月現在）の名簿整備を現在行っているので、転居等住所の異動があった場合、支部事務局まで一報をお願いしたい。

◇東京支部

支部長　木村　正雄

東京支部は、ことし十月十日再発足二十五周年を迎えます。

東京支部は、昭和五十九年十月十日【本学、創立記念日】に、当時学長の佐古純一郎先生が、多くの東京在住卒業生が集まり、創立総会が、開かれ、会則を決め、初代支部長に佐古純一郎先生が、就任した。その後、塚原心丸・加藤達男・水山清歴代支部長により東京支部は、支部報発行。（現在44号6月1日発行準備中。東京支部報にご投稿下さい。）

最初は、三島中洲石碑見学会を中心に文学散歩を行い、その後は、テーマを決めバス日帰り、宿泊文学散歩等を実施。又、その時期に合わせ、内外の先生をお招きし生涯教育講座を行っています。

今回三月七日（土）午後二時より、本学九段キャンパスに於いて第八回生涯教育講座を「本学政経学部田村紀之教授」にお願いし、『オリンピック後の中国と米国初の黒人オバマ大統領と日本の関係について』お話し頂きました。外部の人を含めて、大勢の参加がありました。

昨年十一月二十九日（土）に行われた「房総最大の城下町・佐倉」文学散歩報告（著者　今城照子さん

房総最大の城下町・佐倉文学散歩報告

今城　照子（43期）

歴博前の参加者

穏やかな晩秋（立冬が過ぎているので初冬というのだろうが……）の一日。国立歴史民俗博物館・佐倉藩武家屋敷・順天堂記念館等を市循環バスを利用しての見学。

最初のコースは国立歴史民俗博物館。ゆっくり展示物を見学すると丸一日は要する館内を、昼食時間を含めて二時間。日本の文化のあけぼのから近代までをハイスピードのタイムマシンに乗っての旅だった。浅井昭治先生の「各展示室に解説シートがあり自由に入手できる」との助言もあり、解説資料は家で読む宿題とし、館内見学。昼食はオリジナルメニュー「古代米カレー」。食後は紅葉の庭にて集合写真を撮り、タイムトラベルは終了。

次の目的地は復元整備した平成四年から公開された武家屋敷（旧但馬家住宅・佐倉市指定有形文化財）。宮小路町でバスを下車、だらだら坂道を十分ばかり歩いて目的地到着。多分ボランティアであろう案内人が、屋敷の説明を始めたので「あまり時間がない」と伝えると、残念そうな顔をされたが、我々一行に付いて親切に案内、解説をしてくれた。屋敷の材料・規模とも質素で、この時代の豪商や豪農より住居空間は大分狭いようだ。裏庭には僅かな菜園や茶樹、果樹が配され、ここでも浅井先生の解説で、当時の藩士の生活を垣間見ることが出来た。家屋、庭の手入れが良く行き届いており、一層質素かつ倹約であった印象を強くした。

柿落葉佐倉城下の武家屋敷
冬紅葉復元されし武家屋敷

城下町を早足で市立美術館・おはやし館へ。時間の余裕があれば覗いてみたい店が幾つかあったが……。

最後は順天堂記念館。私はここで素敵な出会いがあった。記念館入口のパンフレットを眺めていると、武家屋敷の小冊子が五十円で販売。お札を出して（生憎小銭がなく）購入しようとしたら、受付係が「釣銭がありません」と言うので、鞄の内の小銭を捜していると、後から入館された女性が「どうぞ、これを」と五十円玉を差し出してくれた。「連れが先にいるので大丈夫です」と辞退。「これも何かの縁ですからお使い下さい」「それではお言葉に甘えて」と小冊子購入。受付係、親切な女性、私の三人は笑顔で商談成立。その後皆に追いつき、医療器具、文献等を見学。

解散は夕暮れの佐倉駅。それぞれの電車に乗車し帰路につく。

暮早し歩幅合はせて夫の後

松苓会東京支部は居心地の良い場所で、機会があれば、また参加したいと思う一日であった。

◇静岡県支部

支部長　永井　陵次

支部長を引き継いで

前々支部長の林先生が急逝されて、神津先生が大学の広報のお仕事の傍ら、支部長を兼ねられたのですが、その神津先生が松苓会会長に就任されるに至り、これ以上先生にばかり御負担をお掛けする訳にはいかず、止む無くお引き受けしました。

長年の間、皆様のお世話になるばかりで、大学からも遠去かっておりましたので、西も東も分かりません。神津先生の御負担を軽減するどころか、かえって御心配の種を作っているのではないかと心苦しく思っています。

各関係の皆様の御指導を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

◇松苓近畿

総会と新年互礼の会を開く

60周年記念事業の成功とその協力依頼。今西学長は学生の入口、出口の問題に最善を尽くしていること。二松教育の九段集約校舎として新校舎の新3号館の竣工状況と大学教育の整備と充実に万全を期していることの報告と、私はこの年度末で退職期を迎え、次期に副学長の渡辺和則先生が就かれるとのこと。神津会長は二松は全国区の大学です。全国各地から志望がある姿にするために地方に在る卒業生の後援支援が必要です。地方支部の一層の団結が望まれますと挨拶された。

新春互礼の宴は三重県支部の顧問の杉野茂氏の乾杯をいただいて開宴する。個々の近

況報告に今の世の教育指導の困難とその苦渋の数々が述べられて相互に収穫の多い歓談となった。午後8時、辻一氏、大鋳文五氏の挨拶を受けて意義深く閉宴となる。（斉藤）

平成21年2月21日（土）
午後4時30分～
於、大阪千日前　鳥よし本店
参会　14名

参会者
来　賓
母校教員　今西　幹一学長
本部役員　神津賢一郎会長（27）
会　員
三重県　杉野　茂（14）
稲垣　武（33）
大阪府　小川　直紀（44）
大鋳　文五（19）
世古　幸生（44）
斉藤　衛（49）
奈良県　末吉　榮三（12）
辻　一（39）
木下　善国（39）
兵庫県　竹内　昭徳（47）
和歌山県　明治　利隆（47）
水本　哲也（49）

総会議事
（1）会務報告
（2）会計報告
（3）松苓近畿創設60周年記念事業案と事業推進実行委員の委嘱
（4）近畿選出本部幹事の推薦　兵庫県支部長　武内昭徳氏を承認

互礼会
斉藤事務局長の司会で進行。末吉代表の挨拶は支部創設について。

◇三重県支部

事務局長　小川　直紀

総会、研修会及び新年会

1月17日、総会及び新年会を山口氏夫妻のご好意に甘えて、恒例の会場にて実施しました。総会においては、十九年度事業報告、会計決算報告、続いて本年度の事業報告及び、予算報告の後、経過報告・審議があり、二十一年度には、研修旅行（文学散歩）を再開することになり、鈴鹿地区、桑名地区における候補地が確認されました。

続いての研修会は「三島中洲を偲んで」と題し、今回持参した中洲の米寿の作品「寿宴席上作」（掛け軸）の読解から始まりました。当日配布資料に掲載のこの作品の読み下し文を参集の諸先輩に添削頂くことから、中洲の人となりに及び、さらに母校二松学舎との関わりを再確認することとなりました。また、今回偶然にも持ち込んだ樋口一葉の筆になる明治二十五年八月三日付けの「借用金之証書（拾円）宛て先が山崎正助で、同日の彼女の日記に「母君山崎へ金借りに行く調達なる……」とあるので、この珍品登場に所蔵の由来やら真偽については今後の課題になりましたが、二松の教授塩田良平先生の子孫と一葉の子孫との血縁関係についても話題となった研修会、拙蔵する上記二点の文物が、実は二松学舎と繋がっていた研修会でもありました。やはり文物は死蔵することなく公開すべきで、そのことによって、たくさんの知識と出会いを頂くことを改めて知ることとなりました。

続いての新年懇親会では、近況報告を兼ねた自己紹介、それぞれの二松学舎在学当時の思い出話に華が咲きました。

支部総会　出席者
顧　問
杉　野　茂（専14回）
支部長
稲垣　武嗣（33回）
三林　忠明（34回）
山口　良民（37回）
山口　由香（38回）
小川　直紀（44回）
加藤　武俊（49回）
納所　佳子（54回）
竹嶋　秀聡（56回）

◇鹿児島県支部

支部長　岡元　正昭（31回卒）

「思い出」

昭和三十四年四月、東京行きの急行列車に十八歳の少年が乗っていた。それは自分だった。丁度五十年前のこと。二松學舍大学に入学するために鹿児島を後にした。いとこの間借りしている六畳の部屋にころがり込んだのを覚えている。

不安と期待を持って上京した。果して大学はどんなとこ

ろにあるのだろうか。靖国神社の近くにあり都電がスイスイと走っていた。九段上の電停で降りて徒歩で大学へ。卒業した母校の高校より粗末な校舎だった。木造で敷地も狭く教室も数えるほどしかない。本当に「舎」だった。思いおこせば校内は充実していた。一流の教授陣。山岸先生の源氏物語。萩谷先生の伊勢物語。関先生の現代文、加藤先生の文字学。石川先生の十八史略。吹田先生の万葉集。竹内先生の中国語。金子・石橋両先生の書道など今思うと「ゾッ」とするくらいぜいたくな授業だった。生徒は北海道から沖縄までいて家族的な雰囲気だった。中でも四国出身の「乾君」は目立った存在だった。テスト前になると彼のノートを奪うようにして借りた。その乾君がこの世にいないのは夢のようなことだ。漢文の内田先生が来週は唐詩のテストをすると予告されて、その日がやって来た。出欠をとったあと内田先生が背広の内ポケットから問題を取り出そうとされた。その時、ポケットがナイフか何かで切られ、テスト問題がなくなっていた。先生は「スリにやられた」と。喜んだのは生徒達、自分達は拍手喝采だった。スリのおかげで唐詩のテストは中止だった。学校に来てから「休講」の知らせがあった時はとても嬉しかった。靖国神社へ遊びに行ったり、神田へ書店めぐりをしたりした。映画館や喫茶店へ行く金は持っていなかった。

四年間があっという間に過ぎた。自分は長男のため故郷の鹿児島へ帰った。中学校に十八年間、高校に二十年間、国語と書道の教師として勤務した。三十八年間の教職生活が出来たのも「二松」のおかげだと今でも感謝の念でいっぱいだ。退職後は家で近所の子供達や大人に書道と硬筆を教えている。

私達の大学時代と現在とを比較すると、天と地の違いがある。校舎も立派だし、生徒数も多い。生徒数が減少するなか、二松だけは益々発展し、将来社会に貢献できる立派な人材を送り出してほしい。また生徒は二松の卒業生として誇りを持って堂々と生きていってほしい。昨年は大河ドラマ「篤姫」で鹿児島がブームとなった。桜島や焼酎、黒酢、黒豚など全国に知られているところだ。鹿児島県支部総会もここ二年開催していないので責任を感じている。各県ごとに支部総会を行うことはとても意義深いことであり、同窓生としての絆を深めることになる。大学や松苓会の発展をお祈りし、また、松苓会報四十号発刊を祈念して終わりにします。

訃報

萩谷　朴
二松學舎大学名誉教授
平成二十一年一月二十四日
死去　九十一歳

大正六年、大阪市生まれ。二松學舎専門学校、二松學舎大学教授を歴任。著書に「平安朝歌合大成」全十巻等がある。

三島中洲石碑一覧

本会報では、このほど二松學舎創設の三島中洲先生による全国的な石碑を集約することとし、附属図書館のもとでその一覧が作成されました。よって当該支部におかれては碑文等取材のうえ写真とともに御寄稿いただければと思います。

○漢詩碑
会津若松市飯盛山白虎隊墓域
明治四五年　「弔白虎隊墓」
碑刻
青年忠死報藩君
涙落荒邱十九墳
唯惜内訌亡壮士
不従清露外征軍

○漢詩碑　大洗望洋楼詩碑
東茨城郡大洗町東光台子の日原
昭和九年五月
夜登百尺海湾楼
極目何邊是米洲
慨然忽發遠征志
月白東洋萬里秋

○碑
小田城墟碑（北畠親房公遺跡）
茨城県筑波市小田
明治八年秋　昭和十年国の史跡に指定

○碑
萬里小路藤原藤房公遺迹碑
茨城県新治村　遺髪塚
明治九年

○碑
那珂公碑
茨城県
明治九年

○碑
大寶城墟碑
茨城県

○碑
大城戸宗重碑文
石川県白山市鶴木　舟岡山共同墓地
大正十五年九月

○碑
大久保諶之丞詩碑
香川県財田町
平成十二年三月

○碑　賜金紀恩碑
本学柏キャンパス内
大正五年五月

○碑　木戸公神道碑
＊明治天皇の勅命による
京都市東山区清閑寺霊山町
京都霊廟山護国神社
大正二年

○碑　朗廬阪谷先生墓碣銘
東京谷中墓地公園
（天王寺境内）

○碑　朗廬阪谷先生墓碣銘
岡山県　興譲館仰徳園

○碑　陽明洞詠詩碑
中国貴陽　陽明洞側
明治三七年九月（光緒三十年八月）

○碑　高島公園記碑
長野県諏訪市　高島城公園内

○碑　木戸公神道碑
箱根新道記念碑
神奈川県箱根町

○碑　松平春嶽碑
福井県福井市　福井城内

○碑
島根県

○碑　生薗碑銘
岡山県高梁市頼久寺町
頼久寺内
明治三六年三月

○碑　三村公家親碑
岡山県高梁市頼久寺町
頼久寺内
大正四年二月

○碑　生薗碑銘
岡山県倉敷市中島五一六
実際寺内
明治三六年三月

○碑　先妣小野君墓碣銘
岡山県倉敷市中島五一六
実際寺内
明治八年九月

○碑　先考純孝府君之碑
東京都大田区上池台二の六の三　旧三島家庭内
明治十九年二月

○碑　方谷山田先生墓碣銘
岡山県高梁市内山下
八重籬神社
明治十二年

○碑　中洲誕生地碑　山田準撰
岡山県倉敷市中島町五七七
昭和五十九年四月

○碑　方谷園記碑
岡山県高梁市中井町西方
方谷園

○碑
武蔵国豊島郡新堀郷　諏訪神社内

○碑　橘中佐銅像銘
長崎県千千石町

○碑　赤松秋錦碑
岡山県玉島
円通寺

○碑　方谷山田先生遺蹟碑
岡山県新見市大佐小阪部
方谷園

○碑　大磯移街碑
神奈川県大磯字山王後二〇七一西

○碑　拙堂齋藤先生碑文
三重県津市　偕楽公園内
大正四年

○碑　故長岡藩総督河合君碑
新潟県長岡市悠久山
長岡市郷土資料館

○碑
舊長岡藩宰山本君碑
新潟県長岡市悠久山

○碑　閑哉翁の碑
福島県二本松岩代
明治三三年一月

○碑　毅堂鷺津君碑
白髭神社（墨田区東向島三―五―二）
明治十六年

○碑（現在はなし）
東京都　湯島天神内

○碑
故幕府老中松叟板倉公募碑名
文京区本駒込三―十九―十七　東京駒込吉祥寺境内
明治三十年

○碑
田邊君之碑
文京区本駒込三―十九―十七　東京駒込吉祥寺境内
明治四十年

○碑
宮中顧問官従三位川田君墓誌銘
文京区本駒込三―十九―十七　東京駒込吉祥寺境内
明治四十一年

○碑
反射鑪碑
静岡県韮山

○碑
渋沢孺人尾高氏之墓碑
東京都　谷中霊園内

○碑
平山市尹紀功之碑
広島県尾道市住吉社
明治二十九年五月

○碑
理事黒田君綱彦彰功碑
港区元麻布一―六―二十一
善福寺

○碑
吟香岸田翁碑
墨田区堤通二―十七―一
隅田川神社
明治四十四年

讃岐路の中洲先生撰文碑紹介

香川県支部　田片　博伸（院昭62年卒）

十返舎一九の「金比羅参詣続膝栗毛」で、おなじみ弥次さん喜多さんも参詣する讃岐の「こんぴらさん」に、中洲先生の撰文碑を訪ねた。

昨年十二月、松苓会本部より松田存先生の来讃を仰ぎ、香川県支部会を開催した。少人数の参加ではあったが、支部会員名簿の正誤確認を初めとして、恩師の思い出、能に文学、教育にと時を忘れて語り合った。その折、松田先生より中洲先生の撰文碑について関心を向けている旨お話があり、今回の紹介文と相成った次第である。県西部財田町の「鮎返りの滝」漢詩碑は、既に大学広報誌『学』第十四号に紹介されている。そこで、「こんぴらさん」在りながら、気付くことなく前を通り過ごしてしまうことの多い「紀功碑」を紹介することにしたい。

酒蔵金陵の看板「金陵醸造元」（日下部鳴鶴・書）を右に眺めながら、土産物店が軒を連ねる表参道の石段を登っていくと、大門が見えてくる。土産物店はここまでである。大門をくぐると、それまでの空気とは打って変わって清浄の気が漂ってくる。大門内では「五人百姓」といって、特に御神域での商いを許された五軒が左右に傘を並べて飴を売っている。左右それぞれの後方に巨大な石の三宝があり、碑はその上に載っている。両碑とも表には扇面に東宮侍講・本居豊穎（とよかい）の和歌が陽刻されている。「紀功碑」は右側で碑陰に刻まれている。

管見に及ぶところ、公刊の印刷物にこの碑が紹介されたのは年刊誌『こと比ら』（昭和四十年号）「金刀比羅宮神域碑文について」のみであろう。しかしながら、碑の位置が高く見づらいのも一因か、訓読文はあるものの文意が通じにくいところがある。そこで、原碑を再調査の上、浅学菲才を顧みず訓訳に挑戦してみた。

紀功碑

明治甲午（一八九四年）秋、天皇清国に違言の罪を問い、六師を海陸に発し並進す。連戦連捷、遼東を取り北京に迫る。清主震惶し、使を発して地を割き償を納めて和を請う。和遂に成り皇師凱旋す。嗚呼これ天皇の威霊と将卒の忠勇とともにあらずんば、いずくんぞここに至らんや。然りと雖も、まさにいま西洋列国の龍驤虎視し、東洋を朶頤し隙を窺覦せんとす。吾邦の士民、隣邦に一勝するを恃みて枕を高くして安眠するの時にあらず。益々忠勇を奮い、外侮を禦ぎ以て皇威を宇内に宣揚せざるべけんや。ここに於いて、憂国の士大碑を樹て前功を紀し後戒を垂れんと欲し余に銘を請う。銘に曰く、

勝を恃む者は畏るるに足らず。勝を持する者は真に畏るべし。戒むるや海内の同士。碑上の銘誌を忘るることなかれ。独り一国の隆替にあらず。すなわちこれ東洋の興廃なり。

明治三十一年（一八九八年）八月

東宮侍講従四位勲三等文学博士三島毅撰

錦鶏間祗候正四位勲三等金井之恭書

西讃高室安賀浅吉建之

備中倉敷藤田市太郎刻

日清戦争の勝利、そして三国干渉以降欧米列強の中国分割の動きが強まり、その後大門内左側の「北征記功碑」（日露戦争、同じく中洲先生の撰文）へと進んでいく時勢がよく出ていて興味深い。また、書丹は鳴鶴、一六と並ぶ明治の代表的書家金井之恭（号金洞）によるもので、「孟法師碑」を彷彿とさせる。

香川県内には他に有名な「大久保諶之丞君碑」などの中洲先生撰文碑が在る。先ずは県内から調査を進めていきたい。こうした調査が全国の松苓会共同で進められたら、実に愉快だと思うがいかがだろう。

松苓会会員業績

○五井　信氏（五三回）
田山花袋　人と文学
勉誠出版刊

○井上　治代氏（四一回）
墓をめぐる家族論
誰と入るか、誰が守るか
平凡社新書　平凡社刊

○新書漢文大系6明治書院刊
「唐詩選」渡部　英喜氏（院博六回）

同12
「荘子」石川　泰成氏（院博二三回）

同13
「韓非子」篠田　幸夫氏（院博二七回）

同14
「史記」（列伝）
佐川　繭子氏
（院博三三回）
同15
「詩経」福本　郁子氏
（院博二八回）
同22
「伝習録」鍋島　亜朱華氏
（院修三三回）
○菊地　誠一氏（院博三二回）
わが心を活かす行動学
明治書院刊
○池井　昌樹氏（四三回）
眠れる旅人
思潮社刊
○犬飼　公之氏（三四回）
埋もれた神話
古代日本の人間創成
おうふう刊
○中里　昌之（麦外）氏
（三六回）
句集　宿儺
吹虚洞刊
○磯　水絵氏（院博一〇回）
「源氏物語」時代の音楽研究―中世の楽書から―
笠間書院刊
○戸田　佳子氏（院修三九回）
歌集　九段坂
角川書店刊

プロフィール

①都道府県　②氏名　③生年月日　④出身地　⑤出身校　⑥大学在学期間　⑦卒業回数　⑧卒業後略歴　⑨現職

①埼玉県
②平田　雅利
③昭和17年6月16日生
④京都府京都市
⑤大阪電気通信高等学校
⑥昭和37年4月～
昭和41年3月
文学部国文学科
⑦第34回卒
⑧オリベッティ㈱、日本学園高等学校国語科講師、衆議院国会議員秘書
⑨㈲ヒラタ商事（家具小売業）代表取締役社長

①北海道
②加茂　忍
③昭和20年9月7日生
④北海道室蘭市祝津町
⑤北海道立室蘭清水ヶ丘高校
⑥昭和39年4月～
昭和42年3月
文学部国文学科中退
⑦第36回中退
⑧父の稼業設立参加、有限会社加茂電子工業　北海道内通信工事
昭和45年3月　大分製鐵所建設に参加、現在に至る
社員10名
⑨有限会社加茂電子工業　代表取締役
金子清超門下　自詠自書清眞會理事

①静岡県
②永井　陵次
③昭和20年8月3日生
④静岡県静岡市
⑤静岡県立静岡高等学校
⑥昭和41年4月～
昭和45年3月
文学部国文学科
⑦第38回卒
⑧静岡県立伊東高校（定）、田方農高、静岡商高（定）、静岡工高、清水西高・同校定年退職
⑨川根高校非常勤講師

①神奈川県
②廣田　克巳
③昭和22年3月6日生
④福岡県
⑤福岡県立嘉穂東高等学校
⑥昭和41年4月～
昭和45年3月
文学部国文学科
昭和45年4月～
昭和47年3月
大学院修士課程国文学専攻
⑦第38回卒　修士第5回
⑧昭和47年4月より神奈川県立高等学校に奉職、平成19年3月に定年退職（生田高校、綾瀬高校、秦野南が丘高校、愛川高校）
⑨二松學舍大学学生募集特別委員他

①群馬県
②新井　喜義
③昭和18年3月18日生
④群馬県
⑤群馬県立渋川高等学校
⑥昭和40年4月～
昭和44年3月
文学部国文学科
昭和44年4月～
昭和47年3月
大学院修士課程
⑦第37回卒　大学院第5回
⑧私立東京農業大学第二高等学校（昭和47年～平成20年まで）
⑨平成20年3月　私立東京農業大学第二高等学校定年退職

①秋田県
②三浦　基
③昭和26年1月23日生
④秋田県潟上市
⑤秋田県立秋田高等学校
⑥昭和44年4月～
昭和48年3月
文学部中国文学科
⑦第41回卒
⑧秋田県立能代工業高校、金足農業高校、男鹿工業高校、新屋高校、秋田北高校、秋田南高校教諭、秋田東高校教頭、秋田県総合教育センター主幹、男鹿海洋高校長
⑨秋田市立御所野学院高校長

学生課外活動助成

躰道部

我々躰道部は、一昨年・昨年に続いて3年連続で褒賞の栄誉を授かる事ができました。

本年も先輩方の支援・指導があったからこそ得ることのできた栄誉であり、今後もその事を忘れず、慢心せず、部員一同精進していきたいと思います。

松苓会よりこのような形で御支援頂けたことに感謝すると共に、来年もより一層活躍していきたいと思います。

躰道部主将　柴山　侑大

この度、四年間という長いようで短かった学生生活の集大成として全国学生大会において、個人種目・団体種目両方で成績を残せたことを大変うれしく思っています。

また、松苓会よりこのような栄誉を授かり誇りに思うとともに、責任も感じています。皆様の助力・協力あってこそのこの栄誉だと考えています。

この栄誉に恥じることのないよう社会人になっても精進していきたいです。

文学部中国文学科四年　矢野　結子

この度、読売書法展で思いもよらなかった「秀逸」という大きな賞を頂くことになりました。驚きと共に喜びでいっぱいです。読売は大学一年生から、毎年2×8サイズの縦三行書きのスタイルで出展していましたが、今回やっと自分でも納得のいく作品を書く事が出来ました。一昨年も松苓会から褒賞金を頂き、また来年も二松學舎大学の書道専攻として頑張らなければと言う気持ちでした。結果、在学中に賞を頂く事ができ、本当に嬉しく、また、恩返しができた様な気がします。二松學舎大学で悔いのない学生生活を送る事ができて本当に良かったです。ありがとうございました。

春からは、警察学校に入校する事になり、勉強や訓練で忙しくなると思いますが、穏やかな気持ちで筆を持つ時間を大切にしたいと思います。大学での思い出を忘れずに、今後も書に精進してまいりたいと思います。

「第二十五回読売書法展に入選して」

文学部中国文学科　竹之下　まりあ

読売書法展に初出品し、初入選することができました。私は二松學舎大学で中国文学科に在籍し、書道を専攻しました。また、放課後には所属するクラブ（文人画研究会）で書道と水墨画を学び、毎日、知識を吸収し、技術の向上に励んでまいりました。その四年間の弛まぬ努力が、今回の記録へと結びついたのだと感じております。

私は平安時代中期に活躍した能書家、藤原佐理を研究しており、この佐理の不羈奔放とした書風の習得を目指しています。今回、出品した作品は、唐詩七言絶句を二首、佐理調を意識しながら草書体で書きました。文字の大小・太細、余白、墨量の多寡に留意し、全体的に豪胆さの強い作品となりました。

今後も公募展に出品することを通じて、自分自身に挑戦していきたいと存じます。二松學舎大学で書道教育を受けられたことを大変誇りに思うと同じに、懇切丁寧なご指導をして下さった先生方に深くお礼申し上げます。

文学部中国文学科　成澤　麻璃生

大学三年生というこの一年間に第十三回全日本高校・大学生書道展賞受賞と第二十五回読売書法展に入選することができ、喜びと感謝の気持ちで胸がいっぱいです。受賞の連絡を頂いた時は本当に驚き、信じられない気持ちでしたが新聞を見て下さった先生や友人のお祝の言葉。それに今回、松苓会という二松學舎大学の名誉ある会の先生方にお祝いをしていただき、受賞できたという実感が湧き、とても嬉しく感じました。五歳で祖母と母の元で始めた習字をきっかけに書道の道を歩み始めることができました。当時、夢中で祖母や母の手本に書いていた習字は高校生から芸術書道となり、習字を土台に視野を広げることできました。そして今、この二松學舎大学で書道を学べて本当に嬉しいです。書を学べる環境はもちろん、沢山の先生方に影響され、書道の魅力に触れられる生活を送れています。残り一年間の大学生活で、日々支えてくれている家族や先生方への感謝の気持ちを胸に、これからも精進していこうと思います。本当に有難うございました。

松苓会奨学金をいただいて

文学部中国文学科
富岡　瑞姫

私には大学をやめざるを得ない家庭の事情がありました。「あと一年で卒業できるのに……」「みんなと一緒に卒業できないの」そんな悲しい気持ちでいっぱいでした。

しかし、無事四年に進級できた私に、先生が「松苓会奨学金」制度の存在を教えてくださいました。

この「松苓会奨学金」のお陰で、二松學舍大学を友人と共に卒業することが出来ます。私にとって大学生活は有意義な四年間でした。よく学び、よく遊ぶことが出来ました。

卒業出来ないと悩んだ時、逆転して卒業可能の喜びを与えて下さいました。振り返ってみると私の大学生活は「感謝」の四年間でした。苦楽を一緒に過ごした学友に感謝。親身になって話を聞いて下さった先生に感謝。奨学金によって卒業できるようにして下さった松苓会の皆様に感謝。そして私を四年間、大学に通わせて下さった両親に感謝。このように私の周りにいるたくさんの方々のお陰で素敵な大学生活を送ることが出来ました。「感謝」という大切な言葉を私が持てたのも、「松苓会奨学金」をいただけたお陰です。心から有難うと申し上げます。

今後は社会人として活躍します。この「感謝」の気持ちを忘れずに、一回りも二回りも人間として成長し、社会生活を充実出来るよう頑張ります。本当に有難うございました。

「歌会始の儀」入選

平成二十一年の「歌会始の儀」の一般選者に、本学文学部二年の丸山翔平さんの詠進歌

夕風のなか走り出す僕が生む
向かひ風受けまた加速する

が入選しました。

お題は「生」。一月十五日(木)に皇居で「歌会始の儀」が行われました。

二松學舍大学教員免許状更新講習のご案内

日程　平成21年8月17日（月）～21日（金）
必修講習　8月17・18日　（2日間）
選択講習　8月19・20・21日（3日間）

会場　二松學舍大学　九段キャンパス
〒102-8336　東京都千代田区三番町6－16
東京メトロ・都営新宿線「**九段下**」駅下車　2番出口より徒歩8分
JR・東京メトロ「**飯田橋**」駅下車徒歩15分

受講対象者　次の生年月日に該当する現職教員及び受講対象証明書を用意できる者
●昭和30年4月2日～31年4月1日生
●昭和40年4月2日～41年4月1日生
●昭和50年4月2日～51年4月1日生

受講時間・費用　下記の3種類からお選びください。

受講内容（受講時間）	一般受講者	本学卒業生受講者
必修講習＋選択講習の受講（30時間）	30,000円	20,000円
必修講習のみ受講（12時間）	12,000円	8,000円
選択講習のみ受講（18時間）	18,000円	12,000円

募集人数　各講座の定員・募集人数は次のとおりです。
〔必修講座〕100名定員「教育の最新事情」
〔選択講座〕100名定員「生徒理解に基づく生徒支援と生徒指導」
「現代文の教材と指導法」
「古典の教材と指導法」
※「書道の教材と指導法」（50名定員）

講習内容

8月17日(月)	必修講習(12時間)	教育の最新事情①	○この件についてのお問い合せ先 二松學舍大学　教学課 教員免許状更新講習係 宛 TEL 03-3261-7406 FAX 03-3261-1324 E-mail:koushin@nishogakusha-u.ac.jp
8月18日(火)		教育の最新事情②	
8月19日(水)	選択講習(6時間)	生徒理解に基づく生徒指導	
8月20日(木)	選択講習(6時間)	現代文の教材と指導法	
8月21日(金)	選択講習(6時間)	※古典の教材と指導法	
	選択講習(6時間)	※書道の教材と指導法	

※「古典の教材と指導法」と「書道の教材と指導法」は、同日実施のためどちらかの講座を選んでいただくことになります。